

保育における子どもの体験（5）

～「人とのかかわり」「ことば」の視点から～

梅 田 優 子
永 井 裕紀子

I. 目的

現行（平成29年に告示）の幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂において、幼児期の教育・保育において「育みたい資質・能力」が、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」の3要素に整理がなされると共に、10項目の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示された。

この「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」は、幼稚園教育要領等の領域ごとに示される「ねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿であり、指導を行う際に考慮するもの¹であり、「各領域に示すねらいは、幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連を持ちながら次第に達成に向かうものであること」（下線筆者）とされている。

そこで我々は、実際の保育場面で子どもがどのような体験や学びをしているのかを明らかにするために、まずは5歳児クラスを対象とした観察を行った。本稿においては、子どもの「かかわり」と「ことば」の視点から、実際の保育における子どもの体験を検討・考察することを目的とする。

II. 方法

新潟県内Z幼稚園における5歳児クラス25名の保育場面の観察を行った。観察内容はメモと3台によるデジタルビデオカメラに記録した。観察終了後、子どもの発話や遊び・活動の状況を文字化し分析資料を作成した。観察は20XX年度に原則月1回の割合で実施した。本稿では2学期の子どもの姿の検討を行う。観察日は20XX年9月13日、10月30日、11月20日、12月4日である。観察時間は8時45分から14時15分である。観察で得られた録画データは研究目的以外では使用しないこと、発表の際には個人が特定されることのないようにすること等を園及び担任保育者に伝え、調査の実施と研究発表に関する同意を得た。

本稿においては、第3報と同様に、ある一人の子どもを中心としながら検討を行なって

いる。対象としたSは、このクラスの担任が、遊びや友達との関わりにおいて詳しくその様子を捉えていきたいと願っていた子どもでもある。好きな遊び（自由遊び）の場面における、Sを含むグループの遊びや活動の状況を捉えている11月と12月の事例を取り上げ、子どもの「かかわり」体験がどのようなものであるか、そこでの「ことば」の育ちについての検討・考察を行う。

なお、観察園におけるおおまかな保育の流れは以下のようになっている。

(例：5月のある1日の保育の流れ)

- 8：45～10：10 順次登園 好きな遊び
- 10：10～10：30 片付け・トイレ
- 10：30～12：00 クラス全体での活動
- 12：00～13：00 給食準備・給食
- 13：00～14：00 係活動
- 14：00～14：20 帰りの会

この園での午前中は、子ども自らが主体的に環境に関わって展開される好きな遊びの時間と、クラス全体での活動の時間がある。年齢によって、また同じ年齢でも時期やその日の状況等に応じて、好きな遊びの時間とクラス全体での活動の時間の長短は変化する。本稿で検討を行うのは下線が引かれている時間帯の事例であり、「事例11-1」は11月の事例の1つめであることを示している。

Ⅲ. 結果及び考察

1. Sの他者との「かかわり」体験 ～継続する遊びの中で～

(1) 共に遊んできたメンバーで、自分たちの遊びの場を作り出す

事例11-1

(卓球台の遊び)

Sは登園すると、他の子どもが遊んでいる様子を動きながらしばらく見て過ごした後、積み木コーナーから50cm くらいの高さの積み木を迷いなく運び出す。運んだ積み木を2列に少し離して並べ、その上に板を渡し、テーブルのような状態(卓球台)を作り始める。少し積み木を運んでは、他の子とところへ行っていたが、一緒に遊んでいるR子が、その遊びに必要な手作りの道具をしまっている箱を持ってやってくると、Sは積み木を続けて運び出す。

担任から、Sが積み木を並べ始めた場が他の遊びともぶつかり合うから移動して欲しいとの言葉がけがあり、Sが頷く。卓球台の位置を移すために、担任と共にS

は組み立てた状態のものを動かし始める。R子も、持っていた箱を邪魔にならないところに置くと、積み木の移動を始める。テーブルが出来上がると、中央のあたりに、自分たちが作ったネットをガムテープでつけて、卓球台が出来上がる。

慣れた様子で積み木を選んで並べていくSの様子や、R子の持ってきた箱に卓球の遊びに使う手作りのラケットがしまわれていたことなどから、継続している遊びであることがわかる。Sは、自分から積み木を運び始め、R子も自ら箱を持ってきており、卓球の遊びをするつもりであることが伝わってくる。「入れて」や「一緒にやろう」といったような言葉をお互いにかけることは見られないが、R子はSの様子を見ており、SもR子の姿は目に入っていて、お互いその遊びを一緒にするメンバーとして認識されていると思われた。

また、Sの遊びの場作りのための積み木運びも、最初は一つ運んでは周りを見渡したりしていたが、R子が箱を持ってそばに居始めた頃から、続けて運ぶ様子に変わっていった。共に遊ぶ存在が居ることが、自分たちへの遊びへと意識を向けさせ、積極的な取り組み姿勢につながっていることが伝わってきた。

この場面では、担任の言葉にSが頷いた以外、その後も二人の間には会話は見られなかったが、リラックスして黙々と積み木を積んでいるようであった。遊びの継続性が出てくる5歳児にとって、その遊び仲間としての存在は、特段のやり取りをすることなくとも、共に動き、遊びだせることが見えてくる。

（2）遊びの続きが自然に始まる

事例 11 - 2

SとR子は、段ボールでできたラケットを持って、卓球台に相對して立つ。

Sが球（手作りの紙製）を持っており、球を投げ上げて大きくラケットを振ってサーブをするが、大きく振りすぎて遠くへ飛んでしまう。Sは自分でその球を取りに行き、再度ラケットを振るが、今度はその場に落ちてしまう。その後も2度サーブを繰り返す、R子の方へ球が飛んでいって落ちると「イエー」と言ってガッツポーズをする。

R子は、自分の方の床に落ちた球を拾うと、卓球台の相手（ここではS）のコート部分に球が落ちるように力を加減しながらサーブをする。その球をSは床から拾ってまたサーブする。

こうしたサーブを繰り返す。打ち終わるだけでも「あははは」と体を揺らしながら楽しそうに笑う。R子が打つと、それを拾おうと楽しそうに動き回る。打ち返せ

ることはほとんどなく、一人がサーブをし、落ちた球を拾って、またサーブするということを繰り返し、相手の方に落ちるとSは「イエー」と大きな声を出してよろこぶ。

お互いに特段声をかけるということもなく、卓球台に相對するように立って、Sの方からサーブを始めて卓球の試合のようなやり取りが始まっていった。体を動かしてそれぞれなりにサーブをするという遊び方なので、お互いに言葉で確認し合うようなコミュニケーションをとる必要性を子ども自身が感じることなく開始できるタイプの遊びであった。

Sのサーブはテニスをするかのように、大きく振りかぶって球を打つので、ラケットが球に当たらなかつたり、ラケットに当たっても、卓球台の上に一旦バウンドするということなく、飛んでいってしまう。そもそもSには卓球台にバウンドさせるということ意識している様子はなく、とにかく大きく振りかぶってサーブを打つことが楽しい、それが相手先の方に飛ばばいい、といったように楽しんでいるように思われた。

R子の方は、卓球台の相手方のコート上に球を入れようとする意識をサーブを打っていたが、なかなか思うようにはいかないようであった。相手方のコートではあるが、卓球台のコートに球をバウンドさせるという、卓球のルールに近い意識を持っていたことが窺える。

ただ、SもR子も、お互いに相手のサーブに何かを言うということはなく、自分の方へやってきた(床に落ちた)球を拾っては打つことで遊びが続いていた。自分なりにサーブすることを楽しんでいるものと思われた。

(3) 関心が同じ子どもと遊びの場が合流する

事例11-3

SとR子は、どちらがサーブしたかはほとんど関係なく、落ちたボールを拾うので、中間地点に落ちたボールなどは、競り合って笑顔で取り合ったりする。時には、球をもらおうとR子の方が追いかけたりもする。最初、すぐ近くのGが時折やってきて、SとR子の二人が卓球をしているテーブルの脇の位置に立ったりすると、Sはラケットで振り払うような素振りをしていた。

しばらくすると、Sは、近くで同じようなテーブルを作っていたGのところへ行き、SとR子とGは、3人で固まって二言三言話す。そのあとはSがラケットでGのお尻を叩く真似をする(ダンボール製なので痛そうな様子はない)などして3人でふざけ合っていたかと思うと、Gは自分が作ったテーブルの下に潜り込む。G

の姿がなくなると、SとR子はラケットを振って笑顔でじゃれ合うかのように球を取り合っている。Gはテーブルから這い出てくると、「つなげるか、これ、結局つなげるか」と言いながら、端にあった積み木を持って、SとR子が作った卓球テーブルの方へ運び始める。「つなげるから、今から。」

担任そこにやってきて、Gに向かって、「一緒にすることにした？」と問いかけると、Gは頷く。担任「そしたら、こっちで（Gの作った卓球台を差し）やったらどう？」と言うと、GもSも頷く。担任はGが組み立てていた卓球テーブルを少し動かしながら、「ごめんねー。あっちに行ってもらったり、こっちに行ってもらったりして。悪いなーと思ってる」と二人に言う（動きが大きくなるので、他の遊びとの兼ね合いで場の確保に担任も苦慮している）

Sは、自分達が使っていたテーブルから中央のネットを剥がす。Gと合流したテーブルにネットを立てようとしている。ネットを伸ばして、ガムテープを取りにいったところで、Gがネットを持つと、「勝手に持ってくな」という。

SもR子も、遊び出しからGの様子を気にする様子は全く見られなかった。

Gは、自分の作った遊びの場（卓球台）ができたものの、対戦する相手はその時にはいなかったようで、SやR子が楽しそうに球を競り合ったり卓球をしたりする二人の様子が気になり、時折見に来ていたようだった。

何度もGが来たことで、今度はSがGのところへ行き、それにR子もついて行った。3人で交わした会話は聞き取れなかったが、3人でラケットで叩く真似をしたりして笑いおどけ合ったのち、Gの方から積み木を運び始めて合流することになっていった。3人での楽しい触れ合い・関わりが、Gの気持ちを動かしているものと思われた。

同じ卓球の遊びをしたいと思っている子ども同士が自分たちで“一緒にやる（遊ぶ・関わる）”ことを、選択し決めていった姿である。卓球台の場が別になっていれば、遊びたいメンバーと、卓球台について選手のように遊ぶ時間を多く取ることができる。場が統合されれば卓球台に向かう時間は少なくなるが、遊びのメンバーが多くなり、対戦相手等に広がりが出る。それを自分たちで選択していくこともまた、好きな遊びの時間においては大切な経験となることである。

担任も、そうした子どもたちの自らの選択を大事な経験と捉えるからこそ、朝の遊びだしの場面で卓球台の場が2つ形成されつつあっても其々の動きを尊重した関わりがなされていた。ただ、場を統合されることを見とった担任は、その瞬間を逃さずに、Gと一緒にする気持ちであることを確かめた上で、Gの作った方の卓球台を使うように援助している。卓球の遊びは、保育室内の遊びとしては、他の遊びよりも大きな動きが伴っているため、場の確保に苦慮していたからである。それぞれの遊びが十分に展開できる

ような場の設定も重要な保育者の援助であるだろう。

(4) 人数が増えた関わりの中で、遊びに役割やルールが生まれる
事例 11 - 4

遊びの場が合流する頃、自分のラケットを持ってHも卓球台のところにやって来ていた。まず試合のようにサーブを始めたのが、SとR子だった。

Hは卓球台のサイドに立つと「レデイ、ゴー」と声をあげる。その声を合図にSがサーブを打つ。球はおかしな方向へ行き、R子はラケットを振ることもできない。Hが「Sくんの～負け」とジャッジする。

GはHとは逆サイドに来て立つと、「レデイ、ゴー」と、Hと声を合わせて、楽しそうに言い始める。Sが、サーブを打つと、ちょうどR子の正面へと球がいく。Sは「イエーイ」と、両手を上げてポーズをとると、Gが「S君の勝ち～」と声を上げる。

対戦相手が、R子からHに変わる。「真剣ね」とSは言い、サーブを始める。相手の方に球がいくとその球をとって、サーブするということをSもHも繰り返す。(紙製の球で跳ねることはなく、また球はほとんどそれてしまうので、打ち返す動きはどちらの子どもにも見られない) ジャッジ役と思われるGは自分も飛び跳ねながらその様子を見ている。

その後、Sがジャッジ役になり、「レデイ、ゴー」とかけ声を繰り返し言う。Gが打った球が他の遊びをしているところに入ってGがなかなか見つけられずにいると、Sは、Hに「あそこに球がある」と指差して教え、Hはそれを拾ってゲームに戻る。

遊びのメンバーが4人になり、ジャッジをする役割をする子どもが自然に出てきて、遊びが“卓球の試合らしく”展開されていくことになった。とはいえ、ジャッジ役の主な動きは「レデイ、ゴー」との始まりの合図をすることであり、合図をすること自体を楽しんでいるように思われた。

この場面では「～の勝ち」と言うのは、最初にジャッジ役を始めた主にHであり、Hの中には卓球の試合やその勝ち負けについてのルール(的イメージ)があったものと思われた。

Gは、ジャッジ役をしているHのマネをすることが楽しいという動き方で、「S君の勝ち～」と声を上げたのは、Sが「イエーイ」とポーズをとっていたからのように思われる。それ以外で、「～の勝ち」と言った発言は見られず、卓球台のサイドに立って「レデイ、ゴー」を時々言うが、それも思い立った時といった感じで、あとは自分もジャンプするようにして体を動かすことを楽しんでいたようであった。

Sがジャッジ役になった際にも、「レデイ、ゴー」の掛け声を繰り返し言うことを楽しんでいたものと思われる。Sは頻繁に「レデイ、ゴー」の掛け声をかけるが、球をサーブする子どもは「レデイ、ゴー」の合図があったからとサーブをするというよりは、自分のタイミングで打つことの方が多く、Sが何度もその掛け声を頻繁に言うことで、その合図でサーブをしているようなタイミングになっているという状況であった。

それでも、遊びに関わるメンバーが増える中でジャッジ役がうまれ、遊びの場にいる子どもたちは、球を打つ（試合をする人）以外にも楽しさがある遊びへと展開されていることが窺える。

（５）遊びの流れの中でルールが次第にできてくる

事例 11 - 5

再度Sが卓球台に立ち、その相手にEが入っている。R子がジャッジ役となる。幾度めかのSのサーブした球が、他の遊びのところに入ってしまい見えなくなる。Sは「あっちいった」と指差すと、Eが拾いにいく。

Sは、Eがなかなか球が見つからないので、Eのそばに行き、その遊びをしている女兒に「あのさ、ちょっと球がちょうどそこに入ったから、入れて」と声をかける。女兒が扉を開けると球が見えて、「ほら」と指す。Eが体を入れて球を出し始めると、自分はサッと卓球台のところに戻っていく。R子の「レデイ ゴー」で再開する。「Eくんの勝ち」。SとR子が入れ替わる。Sはジャッジ役になり「R子ちゃん1点」など声を上げている。

「僕やるねー」とSは言って、コートに戻り、Eと対戦を始める。

Gも正面に立っていたが、SとEの試合になった。順番が決まっているというのではなく、なんとなく入れ替わっている。Sはジャッジ役も少しするのだが、ジャッジ役は割と短い時間で入れ替わって、選手となってサーブを打ち続けている。

製作コーナーにいる担任から「少ししたら他の人とも変わってね。Sさんもね」と声かけられる。Sは、その後、卓球台のサイドに居続ける。Hが「レデイ ゴー」とジャッジ役をする後ろで楽しそうに試合を見ている。

ゲームの流れの中で、やがてどちらが勝ちかといった役割もジャッジ役の子どもの方が行うようになっていった。“打った球が大きく外れて落ちてしまうと負け”といったルールになりつつあるのだが、特にメンバー間で言葉にして確認しあったりする姿は見られず、その時のジャッジ役の「～くんの負け」「～ちゃんの勝ち」といった声や、試合をしている子どもの「やったー」などの表明で、どちらが勝ったのかが決まっていっているようであった。

また、負けると次の人がコートに立つというルールもできつつあるのだが、どういう順番かは決まっておらず、またそのことについて、この時点では子どもたちの中から不満が出るということはなかった。しかし担任は製作コーナーでの援助を行いながらも、S等の遊びの様子を見守っており、コートに立つメンバーが偏っていることから、「少ししたら他の人とも変わってね」という声掛けがなされたものと思われた。

担任からの声掛けがあった後、Sが卓球台のサイドに居続ける姿から、担任の意図を理解していることは伝わってくる。担任は、比較的Sのペースで選手が決まっていることを感じているので、名前を呼んだと思われた。ただ、こうした担任からの言葉がけをきっかけに、選手の順番のルールづくりなどへとはつながってはならず、子どもたち自身で、ルールを作ったり、共有したりしていくということが、メンバー構成によってはそれほど容易ではないことが窺えるだろう。

(6) 遊びが停滞し、かかわりも途切れがちとなる

事例 11 - 6

しばらくするとSは、卓球台のサイドから選手の位置に立つ。自分で「レディスタート」「レディ ゴー」と言いながらサーブする。

選手になっている子どもが、相手からのサーブを打ち返せることはほとんどなく、落ちた球を取りに行き、今度は自分がサーブを打つので繰り返して試合がずっと続いている。何回かやると選手の位置からは外れて、脇に立ってジャッジ役になり「レデーゴー」と言ってスタートの合図をするというような流れになっていった。選手役から外れるとその場を外れて、また戻ってくるような姿も見られるようになる。

卓球台の一方の端の方に座り込むS、E、G、R子。Gがテーブルの下に潜ろうとすると、Sは「なんで～」と強い調子で言う。それでも入ろうとするGに、「崩れる～。入らないで～」と強い調子のまま言うと、Gが、Sの頭を段ボールのラケットで叩くような仕草をする。それに対して、最初、ちょっと強い叩き方になりそうなところで、すぐに力を弱めて、頭を少し撫ぜるような感じで返す。Gは、それに2度ほど払うような感じでラケットをSに対して叩く仕草をすると、そこから去っていく。E、R子は卓球台の周りでなんとなく過ごし、Sは製作コーナーの方へ行っている。

この後、担任が黄色い少し小さめ（テニスボールよりは小さく、卓球のボールよりは少し大きめ）の本物のボールを持って、廊下から入ってきて、卓球をしている子どもに「本物のボールだと楽しいかと思って…」と、卓球台の上にそっとおくと

Eは「ありがとう」とボールを取り上げ、R子にも見せる。Sは卓球台のコーナーに戻ってきて目にはしたが何も言わずにいる。数分後、お片付けの時間になった。

同じ遊び方の繰り返しが続くうちに、試合は行われているが、選手役から外れると時折メンバーが他のところへ抜けていたりするようにもなり、最後には卓球台の一方の端に座り出して、明らかに遊びが停滞している様子が見られるようになってきた。そして、座り込んだ際に、目の中に入ってきた卓球台の下のスペースに関心を持ちその中に潜り込もうとするGのような行動も見られるようになり、遊びの次の展開を求めているような感じが感じられた。ただ、Sにとっては卓球台の下に潜って壊されることには抵抗感があったことがその発言からわかる。Gにとっては自分の思いつきを制される形になり、その場を離れていってしまっている。遊びへの集中が途切れることで、かかわりも途切れがちになっていることが見えてくる。

（７）共に遊んできたメンバーで、クラスの状況を意識しながら役割分担して遊びの場を作る

事例 12 - 1

登園後すぐにベランダの干し柿の様子を見に行き、クラスに戻ってきた子どもたちが、それぞれに前日からの続きをしようと作成途中の段ボールなどを部屋の隅から持ち出し始める。

Sも戻ってきて、動き出した他の子どもの様子を見て、Gのところへ行き、Gが持っていた段ボールに手を伸ばそうとする。Gに段ボールを引っ張り返される（渡す気がないことがSに伝わる）と、Sはこだわる様子なくすぐに積み木のところへ走っていき、積み木を出し始める。

出入り口近くに積み木を持っていく。そこへ、Gが箱を持ってきて、近くに置く。Sは、それを手に取り、自分が設定した積み木の上に、その箱を置く。

Gも積み木の場に行き、積み木を積み始める。少しすると、Sは「もうちょっと小さいさあ…」とGにいい、GもSも、積み木置き場の中では一番小さい積み木を持ってきて、組み立てる。

Sは「早くさあしないと…」と言って積み木置き場に二人でいき、それぞれに薄い板積み木を持ってくる。

11月の事例からおよそ2週間後の朝の始まりである。この日、園庭で採れた柿をベランダで干し柿にしている様子を、登園した子どもから見にいていた。

11月末に、このクラスではお芋パーティーがあった。お芋パーティーとは、地域の人

の力も借りながら、5歳児クラスの子どもたちが自分たちでサツマイモを育て、収穫すると、自分たちで献立を考え、料理をして、4、3歳児も含めてパーティーを楽しむ活動である。こうした活動に向かう際には、好きな遊びをする時間もパーティーに向けた取り組みに自然となっていく。その活動を終えてから2日後といった状況で、担任保育者も遊びがどんなふうになっていくかと様子を見ながらという状況であった。

事例11-1と同じく、継続している遊びでは自然に自らの遊びの場を作るところから遊びが始まっている。ここでは、SはGの手伝いから始めようと寄っていつているが、Gが自分で運ぼうとしていることがわかると、こだわることなく積み木の場に行って運び出している。自然と役割分担が生まれ、自分たち遊びの場を作っていこうとしている。

何度か作り上げている卓球台については、言葉での確認作業もほとんど必要なく場作りが始まっている。途中での確認も「小さめのものにしよう」と必要最小限といった状況で動いている。また、卓球台作りには必須で、積み木置き場では数が限られている、薄い板積み木(天板)を早く持ってこようとしているが、それをいちいち説明することもなく、「早くさあ…」でお互いが状況を了解していることも伝わってくる。クラス全体の様子を意識しながら、自分たちにどうしても必要なものが理解され、目的を持って動いている遊び出しになっていることが見えてくる。

(8) お互いのやりたいことをやってみる

事例12-2

Sは「1. 2. 3」と板を数え中央にあたる部分にネットをたてる。

Gは、手作りの球を振ってラケットに当てようとするが当たらない。「練習なんだよ。練習なんだよ、まだ」と念を押すので、Sは「うん」と答える。Gは球の方を持って、ラケットを振ろうとする。球はうまく当たらず、台の上から落ちてしまう。Sは「下手あ」と笑いながら言う。Gも「もう一回」と言いながら、ラケットをふる。Sはその様子を笑いながら見ている。「今の○○のなし～」と笑顔で言う。Gは、もう一度元の場所に戻り、ラケットをふる。

Sは、自分のところにきた球を拾い、「行くよ～」と、その球を使ってラケットをふる。勢いよく、球(紙製)は飛んでいってしまい、Gが取りに走る。

Sは黄色の(本物の)球を持って来てくれた男児から受け取る。試合相手のGは、箱の中を探っているので、Gのそばまで行き、「本番、本番」と声をかける。

中央のネットが外れており、Sは球を手にしたまま、ネットを立てる作業をする。S「本番、いいですか～」と声をかけるとGが「本番、いいですよ～」と答える。

Sは、ネットを立て終わると、「行くよお」と言って、大きく振りかぶって球(黄

色の本物の球）を打つ。その球は台から大きく外れて飛んでいき、Sは自分でその球を取りに走る。球を取って戻ってくると、2度めもサーブするが大きく外れる。その球を拾いに行き、3度目のサーブを始める。

Gは、別の球を持ち出し、それを自分のラケットに当てようとする。それぞれの側で、それぞれの球でラケットを振る。

子どもたちの中に「練習」「本番」というルールができ、「練習」であればラケットに球が当たらなかつたりと失敗をしても大丈夫といったイメージが共有されていること、また「練習」「本番」をお互いに伝え合って遊びを進められている姿からは、継続されている遊びならではの積み重ねの様子が伝わってくる。

しかしながら、「本番」といって始まったその後の様子を見てみると、サーブはなかなか思うようにできず、SはSで自分の球をサーブすることを繰り返し、GはGで別の球をサーブして遊んでおり、コートに相對してはいるが、それぞれがサーブを打つ試行錯誤している状況であった。この卓球の遊びは、試合のようにして相手があって遊ぶ楽しさもあるが、自分が球を打つことの楽しさが大きいことが伝わってくる。

朝の遊び出しのひとつとき、まずはそれぞれが自分のやりたいことをある程度やって満足するような時間が大事であること、その思いを特段共有するわけではないが、そうした遊びの流れやかかわりが自然に持たれていることが見えてくる。

（9）新たなメンバーが加わることで、遊びやかかわりの流れが変わる

事例 12 - 3

そこに、「入れて」とEがやってくる。Eは、Gのいた所に入ることになり、Gはサイド（ジャッジ役）に立って「レディゴー」と言う。

Sが、ラケットを振るが、球は脇に逸れてしまう。Sはそれを拾って戻ってくる。Eが、その球をもらおうと手をだす。だがSは、再度ラケットを振ってサーブをする。その球がEのあたりに落ちる。

Eは、その球を拾うと、Gが「レディゴー」と声を発する。Eが空振りのような感じになると、Sは笑い声を上げる。Eは再度ラケットを振り、台の位置を意識して、相手のコートにボールを入れる。Sは来たボールを力任せにラケットで当て返すと、そのボールは（Eの側の台には当たらず）大きく跳ね返っていく。S「今の、Eちゃんの負け」とEに言う。

Eも、今度は大きくサーブする。その球が天井に当たり、Eの側の台の上に球がバウンドする。S「えっ」「えっ」 Eも「えっ、今、球が天井に当たったよ」

Eは、自分の側に球が来て落ちていたので、それを拾う。するとG「レディゴー」と掛け声をかける。Eが球を打つ。台から逸れる（台には全く当たらない）。Sは落ちた球を拾って、自分がサーブする。思うようにできず、球が残ると、何度もラケットを振って、Eの方へ行く。

Eがラケットを振って球が逸れると「イエーイ」とSが声を上げる（自分の勝ちといったような声）。何度かそれが繰り返される。Sは「6点、6点」と言っている。

Eが遊びに入ってきたことで、卓球の試合が始まった。Eは、Sのサーブが決まらなかった際に、その球を受け取ろうと手を伸ばしている。Eは逸れてしまったので、今度は自分がサーブの番になるとのルール感覚があることが伝わってきた。Sは、その動きに構わずにサーブを行っている。そしてEの側に来た球を拾ったところで、Gの「レディゴー」の掛け声がかかっているところから、S、Gには、サーブが相手のコートに入るかどうかということではなく、サーブの後に球を拾った人がサーブ権をもつことになるとのルール感覚があることが窺える。

その後Eは卓球台の相手のコートに入ることを意識してサーブし、コートに入った球をSは打ち返すが、その球は全く台の上には当たらず大きく逸れたにもかかわらず、Sに「Eちゃんの負け」と言われてしまう。ここでも、Eの考えている卓球の（一般的に認識されているものに近い）ルール感覚とは違っていることが伝わってくる。

Eは、その後からは自分も、ラケットを大きく振ってサーブする動きに変えていることからS、Gのルールに乗りながら試合に参加していることがわかるだろう。遊びのメンバーにもよるのだが、最初から遊んでいる子どもたちのルールが、その場でのルールとなることはよく見られることである。その際、ルールを言葉で確認するような動きが見られることもあるが、ここではそうした姿は見られなかった。その後、Sは「6点、6点」と声をあげているが、おそらくEは自分が何点なのか等、理解していなかったと思われる。それでも、それぞれにサーブを打ち合うことの楽しさが魅力となって、このメンバーでの卓球遊びはこれまでも繰り返し取り組まれてきており、この日も繰り返し楽しんでいた。

(10) 遊びのルールが混迷する

事例 12 - 4

G「Eちゃんの最後」で、Eがラケットをふる。その球を拾って、Sがラケットを振る。二人は笑い合っている。球のやり取りにはならず、またその球を拾ってSがラケットを振る。

Eは拾った球でラケットを振るが当たらず、上に放り上げた球がそのままS側の台の上でバウンドする。Eは「失敗した」とつぶやくが、Sは構わずにその球を打つ。E側に落ちると、Eはその球を拾ってサーブをする。

Gは、「レデイゴー」の他に、球が落ちた方の名前を呼び「Sくんの負け」「Eちゃんの負け」と声をかけ始め、台のまわりを2、3周する。

SとEの試合がこれまでと同じように続いていたが、Sの打った球がEの目の当たりに当たる。Eは当たったところを押さえるが、Sは（そんなに強く当たってないと思ってるのか）これまでと同じく笑顔を浮かべたまま見ている。Gは「Sくんの勝ち」と言う。Eは卓球台のサイドの方にいき、Gと入れ替わる。

サイドに行ったEがジャッジ役になり「レデイゴー」と言う。SとGの試合が始まる。何度目かにGがサーブする際に、Gのラケットに当たらずにS側に球がいくと、Sが「えーっ」と（非難するような感じで）声をあげる。すかさずEが「今のはなし」と言う。Sは球を持ってラケットを振る。思うように球が当たらず、何度もふりG側に球がいく。

Gは落ちた球を拾うと、あまり上に球をあげずに手のあたりから鋭いサーブをすると、Sはその球の速さに全く手が出なかった。するとSは、「ダメだよ。上だよ」と、球を上上げる動作をしながら言う。Gは「いいんだよ」というが、Sは「ダメだよ。こうやってごらん」と言ったように動作をして見せる。

Gはそれほど高くはあげないが、先ほどよりは少し高くサーブをする。Sはその球を打ち返そうとするが当たらない。その後も、Eの「レデイゴー」に合わせて、それぞれがサーブすることを繰り返す。

Gがサーブをしようとしてボールを落としたりすると、Sは「イエー」と言ったりするが、ほとんど会話らしい会話はなく、お互いサーブしあうことが続く。

この卓球の試合では、いつになると選手が交代するのかという取り決めはなく、ジャッジ役になったGには、いつになっても選手役が回ってこないで、「レデイゴー」の他に、サーブされてきた球が拾えないと「Sくんの負け」「Eちゃんの負け」と言うように声をかけ始めた。しかしながら、選手になって球をサーブすることが楽しい二人は、サーブを打つやりとりを続けていた。選手交代したのは、Eに球が当たってしまい、その際にGが「Sくんの勝ち」と言った言葉が契機になっているが、E本人が、球が当たったことでゲームをそのまま続ける気がなくなって自らサイドに移ったことによると思われる。

また、Eは自分がサーブしようとした球に、自分の振ったラケットが全く当たらないまま、S側の台の上でバウンドした時、Eはサーブになってないと感じて「失敗した」

と呟いている姿から、Eは、自分の中でルールを持って遊んでいることが伝わってくる。しかし、相手のSは構わずにその球を打っており、Eの思っていたことが、Sに伝わることはなかった。こうした遊びのルール理解が一方にあっても、自分たちで共有化していくことが容易ではないことが見えてくる。

また、GもGなりに考えて鋭いサーブを打つが、それはSによって「だめ」と否定されてしまっている。Gは「いいんだよ」と一度は言うが、重ねてSによって「だめだよ」と否定されたことで、それ以上は主張することなく、なんとなく少し球を上げたようなサーブを行なっている。

この遊びでは、全体としてSがリーダー的な役割をとっているが、S自らが自分の考えているルールを全体に言葉で説明してメンバーに知らせていくような姿勢は薄く、また、他のメンバーが言っていることややろうとしていることについては、ダメであることは言葉にするが、なぜダメかを伝えて話し合ったり、ルールを確認し合うといったことがなされることはなかった。EもGも、自分の考えていることを言葉にしていくという姿勢は薄く、お互いがサーブをするといった遊び方が続くことになったが、お互いが納得してルールを共有して遊んでいる状況でもなかった。またそうした話し合い等が行われることがないため、結果として、他の子どもの発想や考え、動きなどが遊びに加わりにくくなり、遊びに変化が訪れにくい状況につながっていったと考えられる。

(11) 新しい遊び方を思いつき、アイデアを言葉で仲間に伝えるが伝わらない
事例 12 - 5

GとSは、場所を交代する。

Gは球がうまくラケットに当たらず、手で投げる。投げた球をSは拾ってくる。場所を交代してサーブする。Gの球が遠くへってしまうと、Sは「ゲームオーバー」とGへ言う。Gは「どうして?」と問いかける。「……(聞き取れず)」Gはその場に座り込んでいるが、Sは、構わずにサーブを打って、自分で球を取りに行くことを繰り返す。

しばらくして、SとEが選手役になっている際に、Eがラケットを天板の隙間に挟んで左右に揺らして面白がっており「Sくんみてー」と何度か呼びかける。Sはその様子を見て、「いいこと思いついたー」と天板の隙間にボールを落とす仕草をしながら、「ここにボールが落ちたら負け。でも、相手の陣地だったらいい」という。

ただ、相手のEが「レディゴー」と掛け声大きく自分のラケットを倒すと、その合図でSはこれまでと同じようにサーブを打つ。

その後Sは、今度はGに向かって「この穴に入ったら、ポイントもらえる」と言い、

続けて「でも、相手にボール入られたら、0ポイントー」と言う。

ここでも、Gが「レディゴー」と掛け声をかけると、Sは、慌てて球を探しに行く。

試合が再開されようとする際、GとEが選手役とジャッジ役をどちらがやるかで争っていると、Sが「順番順番」と言いながら、対戦相手の位置と、審判役の位置を示す。

Eが「レディゴー」といい、Gが球を転がす。

Sの近くの板の隙間から球が落ちると、「はいー（負けね）」と言う。球をしたから拾い出すと、球を投げてサーブする。

GとEが、場所を取ろうと押し合っている。Eが対戦相手の場所にたつ。

穴に落ちると「負けー」のような声もでるが、これまでと同じようにサーブを打つ。Sは、台の上を転がすように投げるような動作をしたりもする。Eが打ったサーブが逸れると、S「アウトー、アウトー」と大きな声で言う。Eがいなくなる。

Gはうまくラケットに当たらないと手で投げるなど、遊び方が雑になってきており、変化のない繰り返しに飽きがきている様子を感じられた。それは、Sの中にもあったようで、Eに呼ばれて、Eがラケットを天板の隙間挟んで面白がっているのを見て、「いいこと思いついたー」と天板の隙間にボールを落とす仕草をしながら、「ここにボールが落ちたら負け。でも、相手の陣地だったらいい」という新しい遊び方を提案している。

ただ、相手のEは、Sの発言を聞くか聞かないかといったタイミングで「レディゴー」と大きく掛け声をかけながら、自分のラケットを倒す始まりの仕草をする。その合図でSはこれまでと同じようにサーブを打っている。

その後Sは、今度はGに向かって「この穴に入ったら、ポイントもらえる」「でも、相手にボール入られたら、0ポイントー」と言うが、ここでも、Gが「レディゴー」と掛け声をかけると、Sは、慌てて球を探しに行く。

Sは自分の思いつきをそれぞれに言葉にして伝えるが、二人とも試合開始の合図を始めてしまい、自分の思いつきが相手に理解されずに流れてしまう。ただ、Sはその思いつきを試合の合間にやってみるのにボールを転がしてみたり、サーブを打ってみたりしており、遊びはさらに散漫になって停滞していった。

(12) 自分のアイデアを遊びの中で形にする

事例 12 - 6

Sは、Gが対戦相手の位置にいるのだが、ゲームをやめてコート部分の天板をずらし、隙間を開けていく。その後に、一番端にあった積み木を一つ倒す。

近くで積み木を使って遊んでいた女兒たちのところへ行き、「積み木が2個いるの」と交渉し、板状の積み木を借りてくる。その板を倒した積み木と天板のあいだに斜めに立てかける。

一旦その場を離れたSが戻ってくると、ちょうどEがその坂を少し動かそうとしていた。Sは、さっと板の前に座りながら「違うのー」とEに言い、周囲にあった積み木でその斜めになっている板を固定する。そして、「ここをねー（転がる感じでなぞって）落ちたらアウト」とEに言う。Eは黙って様子を見ていたが、その場を離れていく。

Sは、製作コーナーのあたりで担任が関わっている遊びを見た後、卓球台のところに戻ってくると斜めにしておいた板が落ちている。そこへ、もう1枚の板を持ってEが帰って来ていた。すぐ近くにはGも座っている。Sは「ねえ、何やってんのお!」「意味わかんないよー!」と声を荒げる。

Sは、その場を離れ、ガムテープを持ってくる。Eは、何も言わず、自分が持ってきた板を持ったまま、反対側に行き板を立てかけ始める。Sは、板の上の方にガムテープをつけ、固定しようとする。Sが作業しているすぐそばにある積み木に座り始めたGに「〇〇なのー」と少し強い調子で積み木から立つように促す。(Gは、その場を離れて、Eの様子が見える位置に行く。)

Sは、ガムテープで板の上部を固定し、板の下部を、他の積み木で囲って固定させると、「ねえみてー」とGに声をかける。Gがそばにやってくると、板の途中に貼り付けてあった、水色のテープを指差しながら「これ毒の水ー。ヒューって」と言いながら、指で斜めになった板の上を流れていくような動作をする。Sの前に座ったGはそれを聞いて「毒の水だったら…」。Sは、すぐにまた製作コーナーへ。Gは、一人になったので、坂になった積み木の上を手を滑らせている。

E（黄色の球を持ち続けている）は、卓球台の逆側に作った坂について、Eのいる方へ移動してきたGに「ここを」とボールを滑らせる動きをつけて動作で示しながら説明している。そこへSがやってきて、「ちょっとこれだと、（ボールが卓球台の板から転がらなくて）できないよ」と言う。E「そっかあ」。S「だから（斜めになった板の上部に手をやりながら）ここにガムテープで貼って」と動作で示す。さらに「こうしたらいいかなと思って」と穏やかに話しながら、板をずらそうとする。Eはそれを受けて、積み木の位置を直し始める。

少ししたところで片付けの声がかかる。

Sは、自分の思いついたアイデアを、実際に積み木を動かして形にしている。一緒に遊んでいたEたちは、そうやって作り替えることをSから聞いていたわけでは

なかったので、Sが場を離れた時に卓球台のところに戻ってきていたEが、その板を動かそうとしていたのも自然なことである。それに対してSは、自分が作ろうとしていたものを守ろうと、「違うのー」と強い調子でEに言い、その後自分のしようと思っていることを動きを中心にしながら伝えていた。

Eは黙って様子を見ていたが、その場を離れて、Sが斜めにした板と同じものを持ってきている。Eは、Sのやろうとしていることを理解し、自分も同じようにしようと思っていたことが伝わってくる。

しかし、ちょうどEが戻ってきていた時に、Sが斜めに立てかけておいた板が滑り落ちて壊れたようになっていて、そこへSも戻ってきたので、おそらくSはEらが自分の立てかけた板を外したように思ったものと思われる。Sは「ねえ、何やってんのお！」「意味わかんないよー！」と強く声を上げて、苛立ちをぶつけてしまったように思われた。

こうして苛立ちをぶつけたことをSも少し悪いと思っているのか、Eが作ろうとしているところにSがやって来た時には、穏やかに自分の考えていることを伝えて、板をずらして手伝おうとしている。Eもそれを受け入れて、積み木の位置を直し始めている姿があった。お互いの思いを感じたり、時に強い調子での関わりがあっても、関係性を継続することができている5歳児の育ちやそのかかわりのありようが見えてくる。

それは、SとGの関係でも見受けられ、強い調子で言い合うことがあっても、その後には、「これ毒の水ー。ヒューって」と言いながら自分のアイデアを伝えようとする姿、その働きかけを受けて「毒の水だったら…」と一緒に楽しもうとする姿が見られている。

(13) 新しいアイデアを担当保育者に伝える

事例 12 - 7

担任から、片付けの声がかかる。クラスの中にいる子どもたちから「えー」と言う声があがる。担任は、「もっとしたかった？」「楽しかったよね、もっとしたかったよね、でも今日はここで片付けにします」と言う。

他の遊びの子どもたちも、先生のそばへ行って「もうちょっとで…」と口々に伝える。担任は「そうだね、もうちょっとでできそうだったのにね～」「今日は片付けまーす」と伝えている。

Sは、自分のラケットを手にししながら、「先生」と担任を呼ぶ。卓球台のところに戻ってきて、Sは「ここを…」と言いながら、斜めにした部分を指す。担任の「面白くなったじゃなあい。ちょっと考えたんだね」の言葉に頷くS。すぐにSは「まだ試してない」と言う。担任が、「試したかったんだね。面白かったんだねえ。そっかー」と言っているところに、反対側からボールが投げられる。そのボールが転がっ

ていく様子を見た担任が「あっ、ここに（斜めになった板の下部が積み木で囲われた部分を指差しながら）入ればいいってことなの？」と言う。Sは、「違うの。ここは、毒の道なの」「え、毒の道なの？ それはダメだねえ」と応えたあと、担任は「でも、今日はここまでにしよう」と話す。

Sは、黄色のボールを拾ってきて、斜めになった板に転がしてみる。担任の「また明日」の声が掛かると、Sは、手に持っていた黄色の球を、自分たちの遊びの道具を入れておく箱の中に投げ入れる。

Sにとっては、自分の新しいアイデアを形にしたばかりというタイミングでの片付けの声かけだった。自分の新しいアイデアを担当に伝え、試していないことも伝えていた。Sは、担任に、「面白くなったじゃなあい。ちょっと考えたんだね」と承認されたことや、その後、投げられたボールが自分の作った板を転がっていく様子を見たこと、そのあと、そのボールを使って一度自分が試してみたことで心を切り替えたように思われた。

遊んでいる最中にはほとんど担任を呼ぼうとするような姿は見られておらず、新しい試しをこれからするというタイミングで、それが時間切れとなってしまったことの残念さを理解してほしいと願ったのは、大人である担任の存在であったことが見えてくる。

IV. 総合考察

1. 「人とのかかわり」の視点から

〈取り組む遊びの違いと子ども同士のかかわりの様相〉

Sの「かかわり」体験において見えてきたのは、子ども自らが環境に関わって遊びを展開する時間において、取り組む遊びの構造的な違いによって、かかわりのありようとその体験の質に違いが出てくることである。

以前の報告ⁱⁱで取り上げた際、Sは、遊び出しの場面でも、遊びの場を作り出す過程においても、相手の意向を聞いたりしながら進めている姿が見られた。これは、継続している遊びであっても、その日、その遊びの場を作ったり、遊びそのものを進めていく際に、お互いの中にあるイメージを確認することが必要だったからと考えられる。

今回の卓球の遊びでは、遊びの場を作る上で中心となる卓球台そのものはほぼ変化させる必要がないものであり、遊び方もサーブを打つなど動くことが中核となる遊びの構造となっていたことで、多くの言葉でのやり取りを必要とすることなく動き出していくことができ、遊びにも継続的に参加できる状況となっていたと言えるだろう。言葉でのコミュニケーションをそれほど得意としない子どもであっても、このような遊びの構造になっている場合、その遊びのメンバーとしてのかかわりを自然に始められ、また、継続していくことができるが見えてくる。

動きの楽しさ、試合やゲームという形で同じように動くことを共有する仲間がいる楽しさがある遊びを存分に味わうことは大切なことである。Sの様子を見ていても、以前の何かを作り上げていく遊びに比べて、伸び伸びと取り組んでいる感じを受けた。一方で傾向性を同じくする仲間が集って、遊べているように思えても、試合のルールが実は曖昧で、その時々で流れていくようなところも多かった。かかわり体験の質がどのようにになっているかをみとっていき必要性も感じさせられた。

〈遊びの停滞とかかわりの質の変化〉

遊びが同じことの繰り返しとなり変化が少ないことで、GやEは遊びの場をフラフラと離れていくことがだんだん増えていった。

Gはジャッジ役が続き、自分が選手として打つ順番がなかなか回ってこないことや、自分の打ち方をSにダメと言われるなど、“自分たちの遊び”（自分も参加しながら作っている遊び）という感覚は少なくなっていたのではないかとと思われる。

Eも、当初自分が持っていた卓球の試合のイメージやルール感覚は、Sとの関係の中では伝わらずにおり、この遊びでの楽しみ方は、とにかくサーブを打つということになっていった様子が見られる。

こうした動きの中で、S自身も、担任が関わっていて楽しそうなやり取りが聞こえてくる他の遊びを見に行くなどの姿が見られるようになった。遊びの停滞で、子ども同士のかかわりも途絶えがちになっていっていることが見えてくる。

それでも、GやEが、この遊びの場に留まっていたのでは、Sと一緒にこれまで遊んできたことが、楽しかった経験としての積み重ねとなっていたからではないかと考えられる。

Sは、自分の思いついたアイデアをもとに卓球台の遊びの場を作り変えようとするが、その新しいアイデアはすぐに形になるわけではなく、その過程で共に遊ぶGやEとぶつかってしまう場面も出てくる。GやEは、その遊びの場に留まっていたものの、楽しそうな笑顔は見られなくなっていった。

それでも、Sの新しいアイデアがわかってきたりすると、Eは同じようなものを反対側に作ろうとしたり、穏やかに提案されたことを受け入れたしていつている。また、Gも、Sの見立てを一緒になって考えようとしているなど、もう一度、そのメンバーで遊びに向かっている姿が見られた。この日は、新しいアイデアを試行錯誤する前に遊びの時間が終了してしまったものの、こうした場面も共にして乗り越えていくことが、かかわりの体験としても大切なことになると感じさせられた。

〈さまざまな相手とのかかわりの中で、多様な関係性を体験する〉

今回の卓球の遊びは、体を動かして遊ぶことが好きなSにとっては、遊び自体も楽しく、

自分の考えで進めていくことのできるかかわりの場となっていた。

先にも述べたように、この遊びでは動いて遊ぶことに興味関心があり、自分の考えていることを言葉で表すことはあまりしない傾向性のある子等が仲間として集って、同じように動きを楽しんで、卓球の試合もそれなりには成立していたが、ルールも実は曖昧で、その時々で状況で流れていく際に、Sの言動に左右されていることも多かった。

Sにとっては、きらくで、自分のやりたいように進めることができる、関わりのある場であり、友達との関係の中で遊びを牽引していく“リーダー”としての役割を体験することができる機会になっていたと言えるだろう。一方で、EやGにとっては、アイデアは受け入れられなかったり、時にSの意見が押しつけられるような側面を持ち合わせており“ボス”的なかかわりであったことも否めない。

Sは自分の言うことを受け入れてくれるEやGに、新しいアイデアを形にしていく際に声を荒げたりもするが、それでも、後半になって、苛立ちをぶつけてしまったと本人なりに感じた際には、自分から穏やかに板の位置を伝えにいくなどの姿も見られた。本人なりに自分のかかわりを顧みて、気持ちをコントロールして仲間に関わっていくといった体験もしていることが見えてくる。子ども自らが環境に関わって遊びを展開する時間において、多様なメンバーと出会い、質の違う“かかわり体験”がなされていくことも必要なことと考えられた。

2. 「ことば」の育ちの視点から

〈言葉で遊びの新しいアイデアを伝える難しさ〉

ことばの力の育ちは、子ども同士のかかわりにおいても影響する。先の報告ⁱⁱⁱで、Sを含む子どもたちは、自分の遊びたいことを言葉でもやりとりしようとはしているのだが、遊びについての新しいアイデア（何をどのように遊んでいくかといったこと）を言葉で相手に伝わるように話すことは、それほど容易ではないことが見出された。

これは、今回のSを含むこの遊びのメンバーでも共通であった。「隙間から落ちた方が負け」といった新しいアイデアをSは言葉でEやGに伝えているが、その言葉だけではどのように遊ぶのか、新しい遊びの楽しさはなかなか伝わらずにいる。その後、Sが実際に自分のアイデアを積み木を組み替えて板を斜めにしていくことで、E等にもボールが転がっていく様子がイメージされ面白さを感じられたものと思われた。アイデアが実際に形になることで、周りにいる子どもたちに伝わり、その遊びのアイデアを一緒にやってみようとする動きにつながっていることは、先の報告と同じ状況であることが確認される。

また、今回の遊びを取り組んでいる最中に、Sは担任保育者を求めていく姿はほとんど見られなかったが、それでも思いついたアイデアが少しずつ形になり、それを試そうかというときに遊びの時間が終わりとなった際には、自分の思いついたアイデアやこれからや

ろうとすることを伝えようとする姿が見られている。自分の思っていることを汲んで理解し、時には言葉で表すことを助けてくれる担任保育者に伝えようとする姿も続いていることが確認された。

〈遊びにもつイメージやルールを言葉で伝え合うことを支える援助〉

前述のように、S などの新しいアイデアが他のメンバーに伝わることも難しかったが、E や G の思っていることや考えていることが S に伝わることもほとんど見られなかった。

例えば、G が鋭いサーブをした時など、言動となって現れる瞬間はあった。このような時に、立ち止まって、お互いに話し合おうとする姿勢をもつ子どもが存在する場合もあるが、今回のメンバーは、自分の考えを言葉で伝えようとする姿勢が薄かったように思われる。

子どもは、自分（たち）で、言葉で考えを整理し伝えることを難しく感じると、言葉でのやり取りが続かず諦めてしまう場合も多い。遊びの展開の中で見られた、E や G の言動は、この遊びの試合のルールにもつながるもので、お互いに理解しあっていくことが、遊びを進める上でも大切なことである。一般的なルールにこだわる必要はないが、自分たちの遊びのルールがどうなっているのか、どうしていきたいのかを自分たちで話し合っただけ、お互いに共有されて遊ぶことの面白さや喜びを体験できることは、言葉の育ちの面でも大変重要な体験となることと考える。

こうした時には、大人である保育者が援助に入る必要性を感じさせられる。もちろん、担任が常に一つの遊びに関わり続けることが難しい面はあろう。また、こうした動きを伴う遊びは、一見すると遊びが成立しているように感じられることも多い。しかしながら、言葉の力の育ちといった側面からは、こうした構造の遊びには、保育者が仲間として加わりながら、例えば S の点数の数え方がどうなっているのかや、E が自分のサーブを「失敗」と感じているのはどうしてか、G が鋭いサーブをした理由や、なぜそれを S がダメなのかなど、S、E、G 各々の考えを引き出し、言葉にしていくことを支え、伝えあうといった体験へと繋げる援助が重要であると考えられた。

引用文献

- i 幼稚園教育要領（2017年告示）第2章 ねらい及び内容
- ii 梅田優子・永井裕紀子 『保育における子どもの体験（3）～「人とのかかわり」「ことば」の視点から』 暁星論叢 71号 2020年3月 pp.25～55
- iii 梅田優子・永井裕紀子 『保育における子どもの体験（3）～「人とのかかわり」「ことば」の視点から』 暁星論叢 71号 2020年3月 pp.25～55

